

丸山先生との思い出

－私学研究，大学経営研究のパイオニア－

東京大学教育学研究科准教授

両角 亜希子

丸山先生との最初の出会いは、私が大学院に入学したばかりの頃、論文を通じてであった。大学経営に研究関心を持ったが、当時の日本では、そうした研究がほとんどなかった。そうした中で、アメリカの研究を参照しつつ、日本の私立大学の経済行動を実証的に分析していた丸山先生の研究は、異色であり、非常に魅力的であった。丸山先生のこれまでの主なご研究は、東信堂から出ている三部作－『私立大学の財務と進学者』（1999年）、『私立大学の経営と教育』（2002年）、『大学の財政と経営』（2009年）－にまとめられているが、私が博士課程に進学した年に刊行された『私立大学の財務と進学者』は何度も繰り返し読んだ。この本を手掛かりに、参考文献に挙げられたアメリカの文献もたくさん読んだし、関心の幅広さに読み返すたびに驚かされた。今回、丸山先生との思い出を、と光栄にもお話をいただき、改めて、三部作を読み返したが、特にこの一冊は、蛍光ペンやポストイット、手書きのメモなどでボロボロになっていた。

丸山先生ご本人と初めてお会いしたのは、博士課程2年の時に参加させていただいた矢野眞和先生の科研費による研究会（高等教育政策と費用負担の在り方に関する調査研究）であった。この研究会は多くの先生方との貴重な出会いの場となったが、お会いするのを一番楽しみにしていたのが丸山先生であった。お髭の顔から、怖い先生かなと思ったのはほんの一瞬のことで、気さくな人柄でにこにこ話しかけてくれた。この研究会は、文部省「私立学校の財務状況調査報告書」と「学生生活調査」の個票を入手し、再分析するものであった。今考えても、非常に貴重なデータを分析する機会に恵まれたと思うが、科研メンバーにはデータが渡され、分析してきた成果を半年に一度、持ち寄り、一日中、徹底的に議論するスタイルで行われていた。著書や論文で一方的に存じ上げてきた先生方がレジュメを作って発表し、時には厳しく質疑しあう姿にワクワクしたのを覚えている。全私学の財務データ、しかも小項目に至るまで、法人単位、学校単位、学部単位などでも分析可能な、すごいデータであった。どこから手をつけてよいかもわからず、私学の会計基準などを一から勉強しつつも、データ分析の楽しさと難しさにはまり、時間だけはたっぷりあったので、「すごい結果を出してやろう」と意気込んで参加していた。半年に一度の研究会で、丸山先生がこのデータを使って、日本の私立大学の資産の実態を分析し、かつアメリカの大学の実態をクロニクル・オブ・ハイヤーエデュケーションで紹介し、さらに日本の6大学の多様な財務構造とその背景についてのインタビュー調査の結果を報告した（この内容は『私立大学の経営と教育』に収められている）。大量のデータと格闘し、溺れかけて、何に焦点を当ててもよいのかわからなかった当時の私にとって、シャープな切り口を設定し、量的分析のみならず、比較研究、事例研究と様々な方法を駆使して、日本の私学の経営の多様な実態と課題を見事に描いたことに「さすがだなあ、かなわないなあ」

と感嘆し、何よりその面白さにとっても興奮した。研究者としての丸山先生を語る上で、この時の衝撃は今も忘れることができない。高等教育の機会均等、高等教育財政など、丸山先生のご研究は広きにわたるが、後輩研究者からみると、とくに私学研究、大学経営研究のパイオニアとしての功績がきわめて大きいように思う。大学で教鞭をとるようになり、こうしたテーマに関心を持つ学生達にも丸山先生の著書をいつも紹介してきた。こうしていつも背中を追ってきたので、『I D E 現代の高等教育』で私の博士学位論文をもとにした著書の書評を丸山先生に書いていただいたことは本当にうれしかった。その後、国立大学財務・経営センター、広島大学に移られてからは、研究会だけでなく、私立学校振興・共済事業団の特別補助委員会や文部科学省の私立大学等の振興に関する検討会議などをご一緒させていただく機会があるが、他の先生にはない独自の視点からのご発言に改めて、比較高等教育研究者としての先生のアイデンティティを感じている。

教え子でもないし、同じ機関で働いた経験もないが、後輩の研究者としてよくしていただき、いつも先生の方から「元気？」と話しかけてくれて、何気ない会話をするのがとても楽しい。思い返してみれば、丸山先生はいろいろな機会を与えてくれている先生でもある。私にとっての初めての依頼原稿のお話をいただいたのも、丸山先生のご紹介であった。私学経営をしている友人ができたからと、食事の場面にもお誘いいただき、楽しい時間を過ごさせてもらった。財務センターや広大で先生が代表者の科研費研究会では、いつも分担者としてお声掛けいただき、勉強の機会をいただいているし、今年度からは広大センターの客員教授のお話もいただいた。そうした丸山先生とのかかわりについて、思いをはせる中で、丸山先生が椋山女学園大学にいらしたころ、学園祭で学生たちの投票による「〇〇にしたい人」にはじめて選ばれたとうれしそうに話して下さったエピソードを思い出した。「何だと思う？」と聞かれて、「彼氏にしたい人」などではなさそうだから「お父さんにしたい人ですか」と尋ねると「冠婚葬祭などでたまに会いたい親戚のおじさん」とのこと。その場にいた人達と「それってそんなにうれしいことかなあ？」と大笑いした覚えがあるが、私にとっても、適度な距離で、気にかけてくれる親戚おじさんのような間柄でいつも接して下さっており、そうした存在のありがたみを最近つくづく感じている。

三部作の最後の著書『大学の財政と経営』のあとがきで、「本書は筆者の高等教育財政と経営に関する三部作の最終作である」と書かれている。しかし、大学経営、財政に関しては、その後も大きく変化し、問題は以前よりさらに山積している。今後も、海外との比較の視点からご研究をさらに発展され、ぜひとも次なるご著書が出されることを期待し、楽しみにしている。